

the People

元気なまちには 元気な主張を続け
元気に行動する 市民がいる

the people (ザ・ピープル)
2016年 7月発行

発行：特定非営利活動法人 ザ・ピープル
代表者：吉田 恵美子
所在地：福島県いわき市小名浜字蛭川南5-6
タウンモールリスポ内

TEL:0246-52-2511 FAX:0246-38-9538
E-mail: the-people@email.plala.or.jp
URL: http://npo-thepeople.com/



復興庁 心の復興事業 みんなの畑夏祭り開催

7月22日、いわき市小名浜上神白にあるふくしまオーガニックコットンプロジェクトのコットン畑の一つ、「みんなの畑」で夏祭りが催されました。これは、今年度採択を受けている復興庁「心の復興事業」の一環として催されたもの。毎月この畑に通ってコットンを育てている双葉郡富岡町、大熊町などからの避難者の方たちと、周辺住民の方たちとの交流の場づくりを目指して企画されました。



当日は、朝方、雨がぱらつく生憎の天気でしたが、コットン畑での開会式の頃にはすっかり雨も上がり、時折青空も覗く絶好の農作業日和となりました。午前中は、コットン畑で草取りなどの農作業に50名ほどが汗を流し、お昼からは近くにある大熊町の仮設住宅集会所を会場として、皆で茹でた素麺に「みんなの畑」菜園で育てたスイカやインゲンを添えた昼食に舌鼓を打ちました。集会所の外にはテントを設け、緑日コーナーと銘打ってかき氷やポップコーン、スーパーボールすくい、輪投げ等を子供達とお年寄りが一緒に楽しむ姿が見られ、夏祭りの雰囲気を楽しみました。



午後から集会所の中では、無地のふくしまオーガニックコットン手ぬぐいにシルクスクリーンやステンシルの技法を使って絵柄をプリントし、世界で1枚のオリジナル手ぬぐいをつくるコーナーもお目見えし、畑の周辺で摘んできた葉に思い思いのインクをつけては手ぬぐいにプリントを行う参加者の姿が見受けられました。オリジナル手ぬぐいを完成させた参加者は、「次回の農作業には、この手拭いを持って参加しなくちゃ」と楽しみにしているようでした。

なお、この夏まつりの経費の一部は「5」のつく日。JCBで復興支援...により賄われております。

わいわいプロジェクトとのコラボ

福島県の助成を受けて行われる広野町へのボラバスの第1回に、新宿からのバスにご一緒させて頂きました。昨年度は、復興庁の新しい東北先導モデル事業として、広野町を応援しようとピープルをはじめとする外部団体が音頭を取って進めていた「広野わいわいプロジェクト」。それが、広野町民によるNPO法人を生み出し、今回のボラバスはその組織が主導する形での実施となりました。午前中は、浅見川沿いのコットン畑での草刈り作業。そして、午後からは3月にプレゼントツリーの仕組みで植樹した防災緑地の木々の下草刈り作業を行いました。



熊本被災地支援報告

4月14日に発生した熊本地震被災地への支援活動として、本会が行ってきたことを報告させていただきます。

市内の学生ボランティアグループONE STEP、神奈川県相模原市のボランティアグループ青い鳥、ま〜のなどと連携して行った募金活動により集まった浄財108万円を手に、5月14日から熊本県にスタッフが赴きました。訪問先は、玉名市に本部を持つNPO法人「れんげ国際ボランティア会」。本会が東日本大震災時に被災者支援活動を実施するにあたって多大な支援を提供いただいた組織です。熊本地震被災後、被災者支援活動を行っているとの報を受け、その後方支援ができればと募金活動を行ってきたのです。

訪問した5月中旬は、震災から1ヶ月。熊本市内に設けられた避難所が徐々に集約、統合されようとしていた時期にあたっていました。まだまだ余震が収まらず、自宅に戻る事へのためらいが大きいと、行政からの指示通りには動けない被災者の方たちの落ち着かない心情を度々耳にしました。それは、福島での東日本大震災当時を思い起こさせ、当時の教訓が生かされず同じことが繰り返されてしまっているという残念な感覚を覚えることも数多くありました。

れんげ国際ボランティア会では、避難所への味噌汁やサラダなどの配食という形で支援を継続的に実施していました。東日本大震災当時とは、避難者自身が調理して食べたいものを食べる「自炊の炊き出し」を本会が行っていましたが、熊本では、地震被災が局地的であり、避難者の多くは熊本市内の通常の業務が行われている職場に働きに出ており、自炊の調理役を担える年代の避難者は日中避難所にはいないこと、気温が上がり食品の衛生面を考えると保管状況などの心配が拭えないことなどを考慮して配食という形をとったことでした。配食時に避難所へ同行した際、コットンパイプの猿バージョン「モンキーパイプ」を避難所の方々にお土産としてお渡ししました。「熊本の皆さんへ 一日も早く災がサルように」とのメッセージを添えて…。

1日も早い熊本の再興をお祈りしています。



タイ支援活動

6月半ば、ザ・ピープルが奨学金を供与してきたモン族の青年のチェンマイ大学卒業が決まったことを受けて、今後についての話し合いをするためタイに出向きました。ナン県で教育支援をする中で、ある中学校の校長先生から「貧しい家庭の子だがとても成績の優秀な生徒がいて、高校に通わせてやりたい。何とか資金を供与してもらえないか?」との依頼を受けてから7年間、彼をサポートしてきました。彼は、チェンマイ大学で政治学を学び、公務員としてナン県に戻ることを目指してくれています。

その彼が大学卒業という時期を迎えたことで、今後彼自身がどうするのか、そして私たちの支援をどうするのか考えなければならない時期になり、彼と話をすることにしました。彼自身、自分が就職して収入を得られるようになったなら、自分が受け取ってきた奨学金を彼の出身中学の後輩たちに提供してあげたいとの希望を語ってくれました。

急遽、チャンマイからナン県まで車を飛ばして、中学の校長先生と彼を交えて計画を立てました。支援される側から、支援する側に、彼はその立ち位置を自らの意思で変えてくれました。それは、大きな手応えを感じた瞬間でした。



最近子供の頃のことを思い出されて仕方ない。そのせいもあるがテレビ番組の懐かしのメロデーに釘付けとなってしまう▼昭和23年当時、我が家は決して豊かではなかった筈。そんな中母は真っ赤なギャザースカートを縫ってくれた。その嬉しさを何かで表現したかった。丁度その頃毎日ラジオからテンポの良い曲が流れていた。「誰を待つやら銀座の街角：時計見ながらそわそわにやにやに：私は咄嗟にスカートにはきかえ腰に手を当て踊り出す。曲名も意味も理解してはいた訳ではないが柱時計を見上げ踊り出すや両親と5歳年上の兄が「また始まった」と拍手喝采。というよりは笑い転げ置を叩いて喜んでくれた。乳離れしなかつた弟は3歳。母のお乳にぶら下がり驚いたような目で私を眺めていたのが忘れられない。大人になつてその曲が銀座カンカン娘だつたことが分かった。69年前のあの光景は私にとつてまさに懐かしのメロデー。そのものなのである▼ところで、復興支援ボランティアセンターにはオーガニックコットン畑農業支援のため年間約4000人のボランティアが訪れている。またその際被災地視察の要望もありガイドを引き受けることが多い。2時間程いわき市の被災状況をバスガイドに変身し必死に説明することになるが、5年を経過した今となつて被災の痕跡は何一つ残っていない。ただ白砂青松と謳われた風光明媚ないわき市の沿岸60キロに渡る津波被害状況と、そこから何を学び後世に何を語り継いで行くべきかを語るようにしている▼いわき市で最も津波被害の大きかつた薄磯地区。その側に立つ塩屋崎灯台と美空ひばりの碑は観光名所の一つでもある。高校生を案内した時のこと美空ひばり知つてると尋ねると3人ほどの生徒が手を上げた。「おはあちゃんが好きだから」と。大部分の生徒は分からないという。時代が変わつたのだとつくづく思った。超高齢化社会の真只中、自分の歳も忘れて遅く生き抜く私達は昔を懐かしんでばかりはいられない。勉強になることなら何でも知りたい聞きたい、今はそんな心境である▼先般、福島原発第一第二の見学会に参加する機会があった。廃炉に向けて大きく前進している状況をこの目で見る事が出来た。日々60000人の方々が懸命に働いている事。構内の殆どは除染が進み普通の作業着でも働ける状況になつている事。そして最後一人一人に初めに配られていた線量計の数値が発表された。値は0.01μシーベルト。即ち見学会参加者の被曝量といふことだ。それは歯のレントゲン検査の際の値であるという。今後こうした体験等を踏まえながら皆さんに語り伝えていきたいと思う。(甘南備)

つばやき